

ヨーロッパ文化圏への中国詩の移入：

I. その小史

フランス語教室 門 田 眞 知 子

1. はじめに

たとえばヨーロッパには、いつ、どのように中国文化が紹介され、中国文学の書物が訳され始めたかというのは、大変興味のある問題である。マルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254-1324) が十三世紀、元代の中国に十余年滞在した後、古フランス語 (ancien français) で記した『世界の叙述』の中で、この国の断片的な描写を残したことはよく知られている。しかし、その中国描写は「正確さを欠いた」¹⁾ものとされる。その約三百年後、十六世紀になって、同じくイタリア人のマテオ・リッチ (Matteo Ricci, 1552-1610) が三十年ほど滞在したが、彼の明代の中国の文化の説明ははるかに抜きんでていた。マルコ・ポーロが漢語を解さなかったのに対し、後者マテオ・リッチは中国語に通じ、ポルトガル語で中国語辞典の編纂をも試みている。また『四書』の訳もラテン語で試みたらしい。これらが後代の作品に較べて、不完全なものであったにせよ、このような功績から、マテオ・リッチを、ヨーロッパでの中国学の祖先とみる向きもある²⁾。

しかし、中国についての知識を一冊の本にして、ヨーロッパに知らしめたフアン・ゴンザレス＝デ・メンドーサ (Juan Gonzalez de Mendoza, 1545-1618) の存在は、その影響力から言っても先の二人を凌ぐ、黎明期を画するものである。メンドーサはスペイン人で、マテオ・リッチと同様、宣教師として中国に滞在したが、1585年、『シナ大王国記』をスペイン語で著すやいなや、パリでそれがすぐさまフランス語に訳された («l'Histoire du grand royaume de la Chine») のを始めとして、ヨーロッパのすべての言葉に次々と訳されていった。そして彼の同時代のモンテーニュ (Michel de Montaigne, 1533-92) の『随想録』や、他のユマニストたちの書物にも引用され、中国に関する書物としては、十六世紀のヨーロッパ人に大きな衝撃を与えたものである³⁾。

こうして大航海時代の波に乗って、極東の国、中国の文物は、主に宣教師を媒介として西洋に紹介されていったことは特徴的である。勿論、その後も、この方面における宣教師の役割は大きい。ヨーロッパにおける中国研究の中では、フランスは最初遅れをとっていたが、十七世紀後半からは、その領域はスペイン、イタリア人からフランス人の手にわたる。それはルイ十四世と宰相コルベールの時代であり、自然科学にも造詣の深い宣教師たちが、積極的に中国に派遣され、明の皇帝に西洋科学などを教授し、同時に中国人の側からは、彼らに本格的な言葉の習得への協力がなされた。その中には、ジャン・ド・フォンタネ (Jean de Fontaney, 1643-1710) 神父などの存在があった⁴⁾。

その後も中国文化のヨーロッパへの移入は、十九世紀半ばまでは宣教師を中心に行なわれた。し

かし同じ宣教師と言っても、十九世紀後半のイギリスにおけるジェームズ・レグ (James Legge, 1815-95) のような大物の出現に至っては、中国研究も単なる異文化圏の文化摂取の域を超えて、学問として成熟する。十九世紀のヨーロッパでは、万国博覧会での東洋の国々の存在の誇示と相俟って、いわゆるエグゾティスム (la chinoiserie) という文化的状況の加速化を見、さまざまな中国関係の書物が訳され、紹介されてゆく。それらはかつての宣教師の手になるような啓蒙主義を超越しており、東洋文化の粋を極めようとした点で、純文学的要素の強いものであった。

ジェームズ・レグは、『道德経』を始め、『四書』・『五経』などを訳しているが、その訳業は現在でもなお、イギリス、アメリカの中国学者たちの貴重な文献として不滅である。

この小論の目的は、こうした中国の文物がヨーロッパに移入され、翻訳されてゆく経緯を、特に中国詩に絞って眺めてみることである。中国詩を敢えて採り上げるのは、この古典詩は本質的に東洋的と言えるものであって、それがヨーロッパ人を惹き付け、ヨーロッパに紹介されたことを、他の分野での紹介以上にユニークなことだと考えるからである。この東洋の詩は、短い漢字の並びの列からなる芸術であり、中国語自体の特色と相俟って、絵画的な、共時的要素を持つ。押韻の構造は、吟ずるという意味で聴覚にうったえるもので、音楽と同系のものである。後者の特徴は、ヨーロッパの伝統詩にも共通する要素であるが、この漢詩の持つ、視覚性と聴覚性を同時に兼ね備えた芸術は、中国語に通ずるヨーロッパ人には大きなインパクトを与えたであろうことは、想像出来る。勿論、彼らの手になった翻訳詩としての中国詩は、今度はヨーロッパの言語構造の中に収められ、いわばその通時的構造において当時のヨーロッパ人を惹き付けたわけである。われわれはそのような翻訳による東洋の詩の紹介とその流れを見ることは、有意義だと考える。また、この点での影響ということについて言えば、黎明期の影響関係とはいくらか異なっていて、フランスとイギリスが面白い相関関係にあったことも事実である。ゆえにここでは、十九世紀の中国詩の翻訳の小史を、この二国を中心に眺めつつ、その特徴を浮き彫りにしてみたい。

その前に、この黎明期にあたる前期の、フランスにおける状況について簡単に触れておくことにする。

フランスでは十七世紀後半には、数学者であり天文学者でもあった、ル・コント神父 (Le Comte, 1658-1708) や、ブーヴェ神父 (Joachim Bouvet, 1665-1730)、またアミオ神父 (Amiot) がいる。重要なのはジャン＝バティスト・ド・アルド神父 (Jean-Baptiste du Halde) であり、彼自身は一度も中国の地に足を踏み入れることなく、北京の宣教師たちの資料に基づいて、中国に関する完璧な四巻本の書を著した (《Description géographique, historique, chronologique, politique et physique de l'Empire de la Chine», 1735)。この著作は、十八世紀において、中国についての最も評価の高い情報源とされた。さらに特筆すべきはド・プレマール神父 (Joseph de Prémare 1666-1735) の存在である。彼は、元曲の『趙氏孤児』 (《L'Orphelin de la maison de Tchao》) を訳したが、さらに彼は「十九世紀以前のヨーロッパでは最良の中国語の文法書」⁵⁾ を書く。しかしそれが印刷されたのは、十九世紀に入ってからにすぎない (1831)。また、このド・プレマール神父やブーヴェ神父らに共通している特徴は、キリスト教の教えが古代中国に既に伝えられ、中国の古典書の中に同じ思想が再現されていると見る傾向である。(アミオ神父は「三」という漢字の並びに「三位一体」の教会のシンボルを見ようとしたし⁶⁾、またド・プレマール神父も、漢字の成立を、「天」の神や「十」字架との関連で解釈しようとした⁷⁾。)

十七世紀の末から十八世紀にかけての重要な人物は、ニコラ・フレレ (Nicolas Fréret, 1688-1749) である。彼は宣教師ではない。彼が中心となって、それ以前から懸案であった辞書の編纂が、エテ

イエヌ・フルモン (Etienne Fourmont, 1683-1741) と滞仏の中国人、アルカード・フォアン (Arcade Hoang) などの助けを得て、十八世紀に入って初めて試みられた。しかしこれは成就されなかった。十八世紀末にはさらに宣教師、アントワヌ・ゴービル神父 (Antoine Gaubil, 1689-1759) の存在も重要なので付記しておく。

以上のような前時代の状況をへて、十九世紀初頭には、コレージュ・ド・フランスに初めて中国学 (la sinologie) の講座が出来、中国に関する文化は、フランスにおいて学問として根を下ろしたわけである。しかし、初代教授のアベル・レミュザ (Abel Rémusat, 1788-1832) のように、『仏国記』や『老子道德経』の一部を訳したり、彼を踏襲したスタニスラス・ジュリアン (Stanislas Julien, 1797-1873) も『老子道德経』を仏訳するなど、宗教関係、とりわけ道教関連の研究が進められ、フランスにおける中国学はその後、道教学の代名詞になるほど、この方面の研究が発展してゆくことになる。

こうした環境の中では、中国詩そのものの紹介はむしろ遅れをとっていたとすることができるだろう。

2. 中国詩訳の黎明期——『詩経』の翻訳

十九世紀に入ると、これまでとは異なる状況として、確かに意識して韻文が訳されてゆく。しかしこの時期の特徴として、中国詩というのは、イギリスでもフランスでも共通して、古代の詩集、『詩経』であり、この民衆詩の翻訳が圧倒的であったことである。この傾向は十九世紀半ばまでとりわけ顕著であった。もちろん、二十世紀に入ってからは、より優れた訳が、イギリスのアーサー・ウェーリー (Arthur Waley, 1889-1966) や、フランスのマルセル・グラネ (Marcel Granet, 1884-1940) らによって、新たに試みられるのだが、依然としてこの『詩経』は中国詩の象徴のように、何処においても中心的に訳されたのである。

『詩経』は民衆詩ではあるが、いわゆる古典としての国家の『四書』の一つに数えられていた。

『四書』は孔子が編纂したものであると、特にヨーロッパではみなされる傾向があった。それゆえに、『詩経』を、一大詩本、聖なる文学書とみなす向きが強かったのかもしれない。ド・プレマール神父もその著述の中で、「聖典 (livres sacrés)」として《Chi-King》に触れている。例えば、ティール (Roy Earl Teele) もこの考え方をする。《The earliest group of poems preserved in Chinese literature is the Shih Ching..》⁸⁾そして孔子による書物だと見做されたことを、やはり大きな理由としている。しかし、別の見方もまた、可能である。これは純然たる民衆詩であることを考えると、この『詩経』の中に、ヨーロッパ的な詩の要素を見だし、その意味で西洋人には、『詩経』はあまたある中国詩の中でも、比較的近い、親近性のある詩の世界に見えたのではないかという見方も出来るのである。それは、中国詩に即して言えば、「賦」と「興」の形式と、詩が、比喩と象徴に彩られていると言ってよいであろうか。さらには女性の恋愛感情を飾りなく、むしろ剥出しに素直に表現しているということにもよると言えよう。このような条件によって、ヨーロッパでの中国詩は、まず何よりも、長い間、『詩経』の世界であったと想像してよいのである。ちなみにフランスでは、早い時期には、上述のフレネが、1714年の論文、《De la Poésie des chinois》の中で、古代詩から《Chi-King》(詩経) までを詳しく説明している。この論文は1823年に、《Histoire de l'Académie Royale des Inscriptions et Belles Lettres》(パリで公刊)の中に挿入された。またイギリス人では、ジョン・フランシス・デーヴィス (Sir John Francis Davis) が1819年に、『漢文詩解 The Poetry of the

chinese』を公刊して、『詩経』を漢字による原詩入りで訳し、解説している。またジェームズ・レグは、彼自身の『詩経』の英訳、The《SHE-KING》の中で、ジュズィット会のフランス人の、ラシャルム神父 (Father Lacharme) が1733年にラテン語訳したものを、最も早く訳された例と推定している。ただしそれは、長い間、草稿のまま1830年になって初めてパリの中国学者、ジュール・モール (Jules Mohl) によって出版された。しかし訳の注も少なく、中国学者には退屈であるばかりでなく、出来具合の悪さに恥じ入るといった、フランス人のコメントをも載せている。なお、このラシャルム神父の『詩経』訳は、1838年、ビオ (Ed. Biot) によって注釈が施され刊行される。レグは、こうした先人の訳に注意して、自分の訳が、専門家の目にも、オリジナルの詩をよく訳したと思われるものであればと願う、といった中国学者としての自負心を語っている。レグによる『詩経』の英訳がなされたのは、1871年である⁹⁾。確かに後年、このレグの訳を、ウェーリーは英語訳での最上のもの、と誉めている。なおレグが示唆したフランス人神父のラテン語訳については、ド・プレマール神父の (1878年にペルニィ神父の手で、やはりラテン語からフランス語訳された)、件の書物の注においても触れてある。

フランスでは、十九世紀末に、クヴルール (S. Couvreur) が『詩経 Cheu King』(1896)の翻訳を出版している。これもまた後に、ウェーリーによってフランス語訳の最上のものと評価されている。こうして、二十世紀始めまで若干の『詩経』訳が輩出する。またドイツでは1880年にヴィクター・フォン・シュトラウス (Victor von Straß)が『詩経』の全訳を発表することにより、ドイツに中国詩の門戸が開かれたということである¹⁰⁾。こうして、レグや、十九世紀後半の、北欧のベルンハルト・カールグレン (Bernhard Karlgren) らの、学問的レヴェルでも充実した訳の出現に到るまで、『詩経』の翻訳の伝統は踏襲されたのである。

このような状況の中で、中国詩が、『詩経』を離れて、いわゆるその傑作であるところの、李白や杜甫の唐詩にフランス人の眼が向けられるのは、ようやく半世紀をへて十九世紀半ばになってからのことである。フランスで初めて唐詩の世界そのものを紹介し、評判になったのは、ジュディット・ゴーチエ (Judith Gautier, 1845-1917) の『白玉詩書』(《Le Livre de Jade》1867) とエルヴェ・ド・サンドニ (le marquis d'Hervey de Saint-Denys, 1823-92) の『唐詩』(《Poésie de l'époque des Thang》1862) であった。この二つの翻訳書が時期を大きくは違わずに、全く趣を異にして刊行されたのは興味ある偶然である。

3. 中国詩訳の転換期——唐詩の訳

確かに、フランスで十九世紀半ばに至って、(二人の人物によって)漢詩の中でも頂点を極める唐詩が訳されたということは、画期的なことだと言える。というのも既に述べたように、フランスでは十九世紀始めにコレージュ・ド・フランスに中国学の講座が設立されて以来、中国学は盛んになり、中国学では歴史の浅いドイツなどからもパリへ学びにくるような状況であったが¹¹⁾、ここで主として研究された分野は、純文学というよりも、思想や宗教学であり、より端的には道教学であったと言ってよいからである。道教が、あたかも《la sinologie》を指すくらい、学問として主流であったのである。フランスにおけるかような伝統はその後、二十世紀に至って、エドゥアール・シャヴァンヌ (Edouard Chavannes, 1865-1918) やポール・ペリオ (Paul Pelliot, 1878-1945) などの出現により、より完璧な様相を見せることになる。こうした背景の中で、いわば主流でない、文学の、さらには唐代・宋代の韻文が訳されたことは、一般人にはもとより、学者たちをも驚かせる

一つの出来事であったとってよいわけである。さて、この画期的な訳業をなした二人とは、先述したように、ジュディット・ゴーチェ（ペンネームのジュディット・ヴァルテール, Judith Walter において）とサン・ドニである。前者は有名な文人の娘であるという点で注目される。他方サン・ドニは中国学者として、初めて唐時代の詩と詩人の解説を付け、フランスに李白や杜甫の存在を、大きく知らしめたのである。結果としてどちらが評判をとったか、ということになると、実は中国学者の地道で正確な解説と訳にもかかわらず、当時、二十二才になったばかりの、若いジュディットの誤訳を秘めた詩集のほうであった。彼女は当時、上に挙げたペンネームで美術評論などを書き、有名になりつつあった。父親も有名人であり、世俗的にも美しく知的な風貌の彼女のなすことは、すべて賛美を以て迎えられたのである。しかし彼女の方の成功ぶりはそれだけによるものではないだろう。ここでは時期的にやゝ早い、サン・ドニの本の方から紹介しておきたい。

サン・ドニは侯爵の家柄であった。彼自身についての詳しい説明は見あたらないが、彼は、先に述べたコレージュ・ド・フランス教授の、スタニスラス・ジュリアンの弟子であったようだ。後に『離騷』も訳している(1870)。ドミエヴィルの説明によれば、「サン・ドニは1874年、コレージュ・ド・フランスのジュリアンの席を継いだ。この感じのよい学者は、当時に来るまで実際、無視されていた中国の詩に興味を持ったヨーロッパで最初の人物の一人である」¹²⁾。しかし同時に、彼はサン・ドニについて、「あまりパツとしない教授」といった表現も用いている。いずれにせよサン・ドニの著した『唐詩』が、当時としては大きな功績であったはずだ。彼の本の副タイトルには、「中国語から初めて訳された唐代の詩」と記されている。最初の、〈中国人における詩法とプロソディ〉というタイトルのエッセイの中で、1843年にビオ編集の『詩経』を見て、この唐詩の翻訳を思いついたとその動機が述べられている。このエッセイでは『詩経』を解説し、「国風」の一部も訳出しているにもかかわらず、いささか冗長である。そのあと、唐代の主な詩人の解説を施しながら、それぞれの詩を紹介している。後に、アーサー・ウェーリーは、1918年刊行の『百七十の中国詩』の中の翻訳者に関するノートにおいて、このサン・ドニの訳とジュディット・ゴーチェの訳を較べて次のように評している。「この本(『唐詩』)は偉大な学者によるものであり、信頼できるものである。ただし中国のプロソディについての知識の部分を除いて。[...] (ジュディット・ゴーチェの訳詩は誤訳があるが、)それにもかかわらず、サン・ドニのものよりずっと読みやすいし、訳した部分の中国詩についての知識もより広い。」¹³⁾誤訳が目立たない、中国学者による翻訳ではあるが、ウェーリーは、欠点の目立つ、詩と文学に優れた若い女性の中国詩訳の方を評価した。そのことが二者の翻訳書の特徴をよく言い表わしていると思われる。ジュディット・ゴーチェについては、彼女とその訳詩について別の論文で論じているので¹⁴⁾、ここでは簡単に触れるにとどめ、この二人のフランス人による唐詩の訳の反響と意義を、フランス内外から眺めておきたい。

ジュディットは言うまでもなく、十九世紀の幻想小説家・詩人、テオフィル・ゴーチェ (Théophile Gautier, 1811-72) の愛娘であったわけで、父親が引き取り、同居するようになった、中国人の丁墩齡 (Tin-Tun-Ling) に、ジュディットは中国語を学ぶ。当然、この中国人は知識人であり、自らも詩作した。ジュディットは彼の詩の何篇かを、李白のものなどと並べて、紹介している。さらにサン・ドニと異なるのは、彼女のほうは、唐代の詩に限定せずに、1867年の初版から、宋代の蘇軾なども扱っているのである。したがって、良い意味で広がりを持ち、悪い意味では雑然とした中国詩の世界を提示しているわけである。ともかく、彼女の崇拜者には文豪ヴィクトール・ユゴー (Victor Hugo, 1802-5) や、批評家のアナトール・フランス (Anatole France, 1844-1924) やサント=ブーヴ (Sainte Beuve, 1804-69) などがいて、この東洋の装飾を施した、エグゾチックな『白玉詩書』

は刊行されるやいなや、大評判をとったと伝えられる。¹⁵⁾さらには1867年はその夏に万博がパリで開かれたことも注記しておきたい。彼女の訳書はその35年後の1902年に改訂版が出され、タイトルは短く『玉書』となる。この版にはすべての詩人に漢字名が記され、「恋人たち」という最初に置かれたカテゴリーの中では、『詩経』の「国風」から、数篇が訳出された。漢の武帝の詩、さらには宋代の女流詩人、李清照(李易安)の詩も六篇、紹介される。ジュディットがその初版でサン・ドニの訳を見なかったか、ということについては、伝記作家はノン、と判断している。少なくとも何ら影響を受けなかったようだ。一方、サン・ドニの方では、古詩型や律詩など、長い詩がよく取りあげられているのに対し、ジュディットの方では、むしろ短い絶句に彼女の嗜好があったように思われる。ジュディットの『玉書』(《Le Livre de Jade》)は、その後も1908, 1923, 1928, 1933年と版を重ねた。一方、サン・ドニの『唐詩』は、最近では1972年に再版されている。

さらにはサン・ドニの訳書では、代表的な唐代の詩人が網羅され、その中には孟浩然、王維、そしてわずかに二篇だが、白居易も納められているのに対し、ジュディットの方では王維の一篇、《Pour oublier ses pensées》(原タイトルは多分、〈酌酒與裴迪〉)を除いて、後の二大唐詩人はすっぱりと抜け落ちてしまっている。

しかしながら、ティールはまた、十九世紀の末に翻訳の二つの流れがアメリカに入り、その流れが影響を与えたこと、その一つがフランスからの、ジュディット・ゴーチェの『玉書』であったことを指摘している(もう一つの流れはステントである)。またサン・ドニのことも言及し、ジュディットの訳との比較を行なっているが、ここではサン・ドニの方を誉めながらも、この両者の訳業の意義を讃える。《Hervey-Saint-Denys was a more accurate translator than Mme. Gautier, but both these French translators are notable for choice of fine examples of T'ang poetry and for the fluent prose they used in their translations. English translators were not to show either such fine taste or such ease of manner in translating for more than a quarter of a century.》¹⁶⁾

実際、ティールほどに彼らの詩の選択や訳を誉めているものか、多少の躊躇もあるが、はっきりしている事は、この二人のフランス人の唐詩の訳書が、(アメリカをも含む)英語圏の中国学者たちにも、影響を与えたということであり、十九世紀後半の、欧米の漢詩の翻訳の潮流に変化を与えたと言える事である。

そこで次に、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけての、英語圏の事情を概観しつつ、中国詩の受容の変化を、文献を提示することにより、一瞥しておきたい。

4. 中国詩訳業の転換期——十九世紀末から二十世紀初頭

十九世紀後半からヨーロッパでは、中国詩の翻訳はもはや『詩経』を離れて、当然のことながら唐代の詩文、さらには宋代の詩訳が主流となっていった。すでに前章で述べたように、この潮流の変化は、フランスからもたらされたのである。レッグの1871年刊行の《The Chinese Classics》の第四巻において、なおサン・ドニの『唐詩』の序に当たる部分の中国詩の中の女性像について言及しているし、1918年の時点でも、ウェーリーが同じく同書についてコメントしていることは、既に前章で触れたとおりである。とりわけジュディット・ゴーチェの『玉書』は英語訳のみならず、ドイツ語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語などの諸国語に速やかに訳された。¹⁷⁾たとえば英語圏では、アメリカ人のウイトール (James Whitall) が、1918年《Chinese Lyrics from the Book of Jade — Translated from the French of Judith Gautier》と題して、何人かの中国詩人の詩を抜粋して訳

している。しかし原詩を見ずに、単にフランス語訳から英語に置き換えていると考えられる。またもっと最近の例では、訳ではないが、トレヴェルヤン (R.C. Trevelyan) が1945年に彼女の訳詩に触れて、「The best in any European language is the very free version of Judith Gautier」¹⁸⁾と評している。英語圏のジュディットの『玉書』の訳に対する見解は、概ね、その訳詩のもつ欠点を認めた上で、なおかつ好意的な見方をしているのが大半である。その傾向は本国フランスにおけるよりも強い、という印象を抱く。フランスでは、彼女の訳詩のポエティックな様相よりも、その不正確な訳ばかりが気になり、称賛もせいぜい二十世紀始めの、ジョルジュ・スリエ (Georges Soulié) の中国文学論あたりまでである。ただもう一点、ジュディットの詩訳の意義は、やはりウェーリーによって確かめられており、それは、1902年の改訂版で宋代の女流詩人、李清照の詩を紹介したことである。この女性詩人をヨーロッパに初めて知らせたのは、ウェーリーの評価するごとく、それはジュディットに他ならなかった。¹⁹⁾

十九世紀後半からは、フランスが唐詩の訳において先鞭をつけたにもかかわらず、実際はイギリスの方が、その後の中国詩の翻訳による紹介などには、整然とした発展が見られるという印象を抱く。そのことに触れる前に、まずフランスのその後の流れを見るのに、詩の翻訳と中国詩文学の紹介を行なっている文献を提示することによって、一瞥しておきたい。1853年には、ポーチェ (M.G. Pauthier) とバザン (M. Bazin) の編纂による、『中国の文献による近代中国もしくはこの大帝国の歴史的、地理的、文学的描写』(La «Chine moderne ou Description historique, géographique et littéraire de ce vaste empire, d'après des documents chinois») が刊行されている。フランスでは、いわゆる中国文学史の類いの紹介は遅い。十九世紀末の1886年にやっと当時、フランス副領事であった、Camille Imbault-Huart (1857-97) の、十四世紀から十九世紀の中国詩紹介 («La Poésie chinoise du 14e au 19e siècle») や同じく1892年の、近代詩や詩人、袁梅の紹介 («Poésies modernes») が目につく。

また、1885年には モンテギユ (Emile Montégut) の東洋の国の書物と心を論じた書物 («Livres et Ames des Pays d'Orient») がパリの アシエット社より出版された。この中には、李白などの詩も若干、訳されているが、訳の文体は全く配慮していない。彼らの西洋文明の枠内で東洋の詩人を扱おうとする。李白に関しては、「李白にはリディアも、ピュラも、クロエもない。女性たちは決して彼のうたには現われない。彼の詩には恋愛感情などの占める場などなく、酔いの燃えるような吐息が満溢しているばかりだ…」といった風である。

十九世紀末にはさらに、この分野での二人のフランス人宣教師による貢献がある。一人はすでに挙げたクヴルール (Séraphin Couvreur, 1835-1919)、もう一人はヴィゲール (Léon Wieger, 1856-1933) である。前者のクヴルール神父はすでに『詩経』を訳したことで紹介済みであるが、彼はフランスでは珍しく、辞書を編纂した。これは古文の中国語のためのものであり、現在でも古文を使う者には使用されるという。また神父だけあって、訳は常にフランス語とラテン語を同時に並べた。後者のヴィゲール神父はアルザス出身であり、もとは医者であった。彼には漢字についての考察の著書がある (Les «Caractères» 1895)。また«Textes Philosophiques»(1906)も著し、その中では『老子道德経』や『莊子』などを訳している。彼はフランス詩人・外交官のポール・クロードルに中国語、中国の宗教について影響を与えた人物でもあった。

ヴィゲール神父の方は、直接には詩の翻訳とは関係がないと言ってよいだろう。さらにはコレージュ・ド・フランスに設立された中国学の講座には、レミュザ、ジュリアンの後に、シャヴァンヌやペリオやグラネやマスペロなど、二十世紀の始めにかけて中国学の碩学が輩出する。しかし、彼

らは直接には文学が専門とは言えず、ここでは省略する。

フランスではこうした流れの中で、ポール・ドミエヴィル (Paul Demiéville, 1894-1979) のような著名な中国学者が登場することにより、中国文学史および詩の紹介の学問的な作業が行なわれるに到ったのであるが、これは今世紀半ばになってからであった。

一方、イギリスではどうであったであろうか。十九世紀初頭にウエストーン (Stephen Weston) が断片的に詩を紹介している。しかしその趨勢はやはり、世紀末からむしろ二十世紀に至って大きく、充実してくると言ってもよい。そのことを説明するのに、イギリスでは中国語の辞書の編纂が早い時期になされたことの意義は大きい。まず、十九世紀前半にはすでにロバート・モリソンによって『華英辞典』が上梓され、世紀半ばには、トーマス・フランシス・ウェード (Sir Thomas Francis Wade, 1818-95) が中国語の辞書及び発音表記を統一化させた。そのことにより、中国語のアルファベット表示にはイギリスでは早い時期から秩序化がなされたわけである。ウェードを継いだジャイルズは、その辞書を改良し (Chinese-English Dictionary)、それは現在でも実用視されている。

十九世紀後半のイギリスでは、ステント (George Carter Stent) が重要である。彼は1871年に中国詩を扱い (《Chinese Lyrics》)、1874年には《The Jade Chaplet》によって、テイルをして、アメリカの中国詩の紹介に二大潮流をもたらした、二人の詩訳者の一人と言わしめている。(もう一人はフランス人のジュディットである。) 彼は、当時始まった雑誌、《China Review》などにも訳詩を掲載していたが、この後者の訳書では、杜甫を13首挙げ、それに対し、李白には83の詩を紹介している。この二大詩人のあとには白居易を置く。訳には押韻はない。彼はすでに中・英ポケット辞典も出版している。

次は何といても上述のハーバート・ジャイルズ (Herbert Allen Giles, 1845-1935) である。当時のイギリスでは (宣教師の他に、) 中国の領事に長く勤務していた人たちが、帰国後中国語の専門家になるといった場合が多かったが、彼もまた、その二十年以上に及ぶ中国での滞在歴を生かして、ウェードを継いで、ケンブリッジ大学の中国語の教授となった人である。むしろ彼が英語圏での、中国詩のアカデミックな紹介とその定着に貢献が大きかったといえるだろう。とりわけ中国詩史の紹介は、各時代の詩人の位置や詩形式の推移を把握するのに重要なものであったはずである。彼はその東洋の詩世界の様相を明快にさせ得たわけである。1884年に《Gems of Chinese Literature》を著す。ここでは、紀元前六世紀から唐代の詩人までを網羅し、壮大な詩の文学史が展開されている。そしてそれぞれ若干の詩を訳すのであるが、ジャイルズ自身が序で述べているように、「訳の過程では、言葉の正確さを厳密にした。だからむしろ学生には便利なものだと思う」という意識のもとに認められたものである。ジャイルズはほかにも著書があるし、先に挙げた《China Review》などにも定期的に中国事情、中国詩を紹介している。

ジャイルズと相前後して、イギリスではロンドンを中心として、中国詩とその翻訳の紹介において華やかな時代が訪れる。その中での中心人物は何といてもウェーリーである。彼はいわゆる在野の人物であったが、訳の正確さとその詩的なセンスにはジャイルズはもとより、後に続く、現代までの中国学者は一樣に大きな評価を与えている。とりわけウェーリーは白居易に惹かれたようである。彼は少しずつ訳し、《Little Review》などに発表したものを、すでに引用した『170の中国詩』 (《One Hundred and Seventy Chinese Poems》) の中に収めている。彼の訳業は枚挙にいとまないが、その中でも1923年の、《The Temple and Other poems》は、唐代に到るまでの文学詩史としても精密な仕事である。そうした状況の中で、中国語は知らなくとも、中国詩の訳業の文学性、詩的価値の高いことで重要なのは、当時アメリカからやってきたエズラ・パウンド (Ezra Pound) であ

る。一時期、彼はウェーリーなどとも仕事を共にしている。「Cathay」の中には、Rihaku (日本語)などの詩が訳されていて、その一部は後に「Selected Poems of Ezra Pound」(1935)に収められた。その序文にはT.S. エリオットがパウンドの訳の鋭利さを、逆説的に「半透明」(translucencies)という言葉を用いて称賛している。(なおパウンドは後年、『詩経』全体の訳も完遂したことを付け加えておく。)

英米文化圏では同じくバイナー (Witter Bynner)やローエル (Amy Lowell)なども中国語の知識はなかったものの、詩訳の試みをおこなっている。とりわけ後者のアミィ・ローエルは、のちに中国語の熟知しているアイスカフ (Florence Ayscough)との共訳で、『松花箋』(「Fir-flower Tablets」1921)の詩の翻訳を出版した。これは大きな評価を得ている。ほかにはバイニング (Crammer Bying)が唐・宋時代の詩人訳のアンソロジーとして出した、「A Feast of Lanternes」(1916)や、二十世紀初頭のハート (Henry Hart)の『百姓』(「Poems of the Hundred Names」(1933)を挙げておく。1930年代のフレッチャー (W.J.B. Fletcher)の、二百余りの唐代の詩訳は、押韻と原詩を並べ置くことにより、意義あるものとなっている («Gems of Chinese Verse」1932)。

以上、英仏二国のそれぞれの中国詩の翻訳の推移を簡単に眺めてきた。時代はこのあと現代へと向かい、それは欧米における中国文学の現在の十全な発展へと向かうわけであるから、一応、その時期には触れなくともよいだろう。十九世紀後半から二十世紀にかけては、いわゆる転換期としての性格が顕著に現われているように思われるのである。

フランスでは、中国語の辞書の編纂が遅れた。そのことは発音表記の不統一性、中国語に対する認識の不完全さ、詩世界への知識の偏りへと繋がり、全うな中国文学の理解には到らない。そのことが上述のフランスにおける傾向に垣間見られるはずである。つまり文学史やガイドブックの類の準備がイギリスに比べて遅れているわけである。(現在は、新中国になってから1948年制定の表記法を、フランス人も統一的に採用しているようである。)一方、イギリスにおいてはそのような初期段階の煩雑さはすでに、ウエード辺りの時期からクリアされている。台湾では今もなおウエード式の発音表記が実施されているという。彼を継いだジャイルズは、さらに中国詩の歴史書およびガイドブックの類を刊行している。そのことによって、イギリスおよびアメリカでは、早い時期から中国の詩人の位置、評価が正当に把握でき、そのことにより詩文学の研究が順当に熟成されていったのである。また文献のカタログにおいてもイギリス、アメリカでの出版は積極的である。フランスでは、アンリ・コルディエ (Henri Cordier)の編纂した作品カタログの「Bibliotheca Sinica」(1878)は、むしろ例外的な存在の重みがある。

こうした背景が、フランスとイギリスの中国の詩の受け入れとその後の摂取の仕方の違いを際立たせてゆく。それが単に、フランス人とイギリス人、アメリカ人の性格の違いによるものかは簡単には言い切れないが、両者のそれぞれの特徴であることは明白である。より主観的な見方が許されるならば、中国詩はフランス人には今だに〈シノワズリィ〉と捉えられているのではないだろうか。一方、イギリス人やアメリカ人の方がこの東洋の詩を理解しやすい気質にあるのではないか。

フランスでは1930年代あたりになって、ようやく文学史の類が現われる。たとえば、マルグリエ (G. Margouliès)による中国文学史 (L'«Histoire de la Littérature chinoise» 1931)や、フランスに留学で滞在している中国人たちによって、いわゆる教科書的な中国文学史の本が刊行される (1933年のSung-Nien Hsuの«Anthologie de la Littérature chinoise—Des origines à nos jours»やTsen Tson Mingの文学史のエッセーなど、いずれもリヨンで刊行されている)。

5. 結論と展望

この小論では、十九世紀から二十世紀にかけての中国詩のヨーロッパへの受容を、とくにフランスとイギリスの二国を中心に概観した。二国はこのことにおいては相関関係があるにもかかわらず、とくにフランスにおいて、その後、イギリスとは異なった独自の道を歩むようになるのは、興味深い。

古典的詩の『詩経』の翻訳が、いわばその黎明期の様相を示しているが、その後、中国詩の世界は徐々に正当に、ヨーロッパに伝播され紹介されてゆく。中国学の大先鞭はフランスが取ったと言うことは可能である。しかし、その後の発展においては、両国はそれぞれの個性にあった道をたどった。フランスでは、ジュディットという独自の存在があったにもかかわらず、いわゆる純文学の方面よりも、むしろ宗教や哲学、——総称して道教と言い切ってしまうのはやや危険があるかもしれないが——、といった方面が主流となるのである。中国文学者の興膳宏氏(京都大学教授)も、その「ドミエヴィル小伝」の中で次のような印象を持たれている。(フランスでは)「十九世紀にあっては、詩歌や戯曲の分野で、当時としてはかなりの水準を示す研究や翻訳が見られたが、二十世紀前半の大家たちは、総じて文学への関心が薄かった。シャヴァンヌが『史記』を訳したのは、あくまでも史料としての重要性からだだし、グラネが『詩経』に惹かれたのは、社会学的な価値からであった。」²⁰⁾

逆にイギリスでは(現在のアメリカの事情はイギリスと同じではないが)、ジョン・ニーダムのような科学者が道教に関心を抱いたが、目立ったところでは、あまり道教学者の姿は見当らないように思われる。中国研究は、彼らにはあくまでも文学研究ではなかったかと思われる。結果として、純粋に東洋の詩の翻訳を通じて詩の宇宙に浸透していったのは、フランスのジュディットの訳業を評価したイギリスの方であり、アメリカ文化圏であったのではないだろうか。フランス人には、この詩の世界はあまりにもエグゾティックなものとして、定着しがたい側面があったのだろうか。

以上のような考察をへて、次回には、中国詩そのものの解釈を問題にしたいと考えている。また逆に、ヨーロッパ文学への中国詩の影響ということに取り組む予定である。その比較の観点を与えてくれるのは、たとえば詩人であり外交官であったポール・クロードルのようなフランス人たちである。この論者は平成七年度の文部省科学研究費補助金による研究調査の報告の一部をなすものである。

注

- (1) Paul Demiéville, «Marco Polo donnait de la Chine un portrait tellement dénaturé.», *Aperçu historique des études sinologiques en France*, p.58, 1973.
- (2) *Ibid.*, p.58.
- (3) *Ibid.*, p.57.
- (4) *Ibid.*, p.61.
- (5) *Ibid.*, p.68.
- (6) Roy Earl Teele, «Through a Glass Darkly-- A Study of English Translations of Chinese Poetry», *Ann Arbor*, p. 43, 1949.
- (7) De Prémare, «Vestiges des principaux dogmes chrétiens», «On doit encore à Prémare la meilleure grammai-

re chinoise que l'Europe ait produite avant le XIXe siècle, *Notitia linguae sinica* (1728), qui ne font du reste imprimés qu'au XIXe siècle (1831).», Paris, Bureau des Annales de Philosophie chrétienne, 1878.

- (8) R. Teele. *op. cit.*, p. 23, 24, 59, 60 など。
- (9) James Legge, «The Chinese Classics», Vol.4, London, Henry Frowde, 1871.
- (10) ギュンター・デボン, 「中国文学の領域におけるドイツ支那学の業績」, (村上哲見訳), 『中国文学報第二十冊』, 京都大学中国文学会誌, p.149, 1965.
- (11) 福井文雅, 『欧米の東洋学と比較論』, 隆文館, pp.46-48, 1992.
- (12) Paul Demiéville, *op. cit.*, pp.81-82.
- (13) Arthur Waley, «One Hundred and Seventy Chinese Poems», Bibliographical Notes, London, Constable and Company, p.21, 1918.
- (14) Machiko Kadota, «Comment Judith Gautier a interprété les poèmes chinois dans *Le Livre de Jade* ?», 『仏蘭西学研究26号』, 日本仏学史学会誌, 1996.
- (15) Joanna Richardson, «Judith Gautier», traduit de l'anglais par Sara Oudin, Biographie Éditions Seghers, Paris, p.73, 1986.
- (16) Teele, *op. cit.*, p.74.
- (17) Muriel Détrie, «Le Livre de Jade :Un livre pionnier», «Revue de Littérature comparée», p.302, 3/1989.
- (18) Trevelyan, «From the Chinese», ed. by R.C. Trevelyan, Oxford at the Clarendon Press, p.xvi, 1945.
- (19) A. Waley, «The Temple and other poems», George Allen, 1923.
- (20) 興膳宏, 『異域の眼——中国文化散策』, 筑摩書房, p.184, 1995.

(1996年4月30日受理)

Introduction des poèmes chinois en Europe:

1. une histoire sommaire

Dans cet article, j'ai exposé une part du résultat de mes recherches sur les situations des poèmes chinois introduits en Europe au XIX^e siècle: il est question de savoir comment ils y ont été reçus et comment ils y ont été interprétés.

Notamment j'ai examiné cette question mettant en lumière les cas des deux pays, de la France et de l'Angleterre; parce qu'ils sont en corrélation intéressante l'un avec l'autre sur ce sujet. Et pour les deux pays, j'ai parcouru l'évolution de l'interprétation des poèmes chinois, du début au tournant durant tout le XIX^e siècle.

